

そんなバカな、とお思いになる方もいるかもしれない。でも、よくよくかみこんでいくと、これが、深い。

いろいろな解釈が成り立つが、事実という実際におきている「出来事」に目を奪われていると、その奥にある「真実」が見えなくなる。見えにくくなる。さらには、まったくその気配すら感じとることができなくなるのが、私たち人間ですよ 気をつけてなさい！ という警告の言葉として受け止めている。

たとえば、昨年末の金融資本至上主義がガタガタ崩壊していく動きは、連日連夜あらゆるメディアを通じて私たちの日常にあふれ出る。こうした「事実」の洪水に、私たちの心や思考は痛み、傷つき、疲れ果ててしまう。

そのうえに、失業や資産が目減りという実生活の「事実」が重なれば、閉塞と失望が広がるのは当然でもある。

で、この言葉の登場である。

ここで疲れている暇はないのである。こうしたさまざまなことがおきてきた、その奥、その裏には何があるのか？ 誤りがあるならば、正すべきは、こうした「事実」という出来事を生んだ根本的な原因や背景を追求し、白日の下にする。そして、二度とくり返さぬよう確認し、前に進む。このプロセスこそが、新しい時代づくりそのものだと思うのだ。「サブプライム」くんのせいにしたところで、何の抜本的解決にもならない。

私たちジニルイは「生きている」のではなく「生かされている」存在でしかない、という地球上の究極の「真実」に、いかに謙虚に立ちもどれるか。

それが昨今の環境問題を解いていく鍵の1つでもあると思っている。

事実は真実の敵なり



NPO 法人ガイア・イ
ニシアティブ 代表

野中ともよ